

チョウ目(鱗翅目)の全科解説



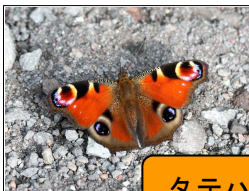
アゲハチョウ科



シロチョウ科



シジミチョウ科



タテハチョウ科



セセリチョウ科

チョウ目, 鱗翅目
Lepidoptera

翅や体が鱗粉でおおわれる。翅は大きく、美しい色模様に彩られるものが多い。体は比較的軟らかく細長い円筒形。多くはストロー状の口吻をもつ。幼虫はいわゆるイモムシ・ケムシで口器は咀嚼型。チョウとガを合わせてチョウ目と呼ばれるが、種類はガのほうが圧倒的に多く全体の95%以上を占める。もっとも、チョウとガには本質的な差はない。当システムでは、蝶と蛾を便宜上分けて管理することとした。(昆虫エクスペローラより)

* 画像および科名をクリックすると、該当科の詳細に移動します。

'2018.4.3 完成 (tentomusi)

* 詳細ページの画像は、すべて「日本大百科全書(ニッポニカ)コトバンク」からの引用です。

アゲハチョウ科

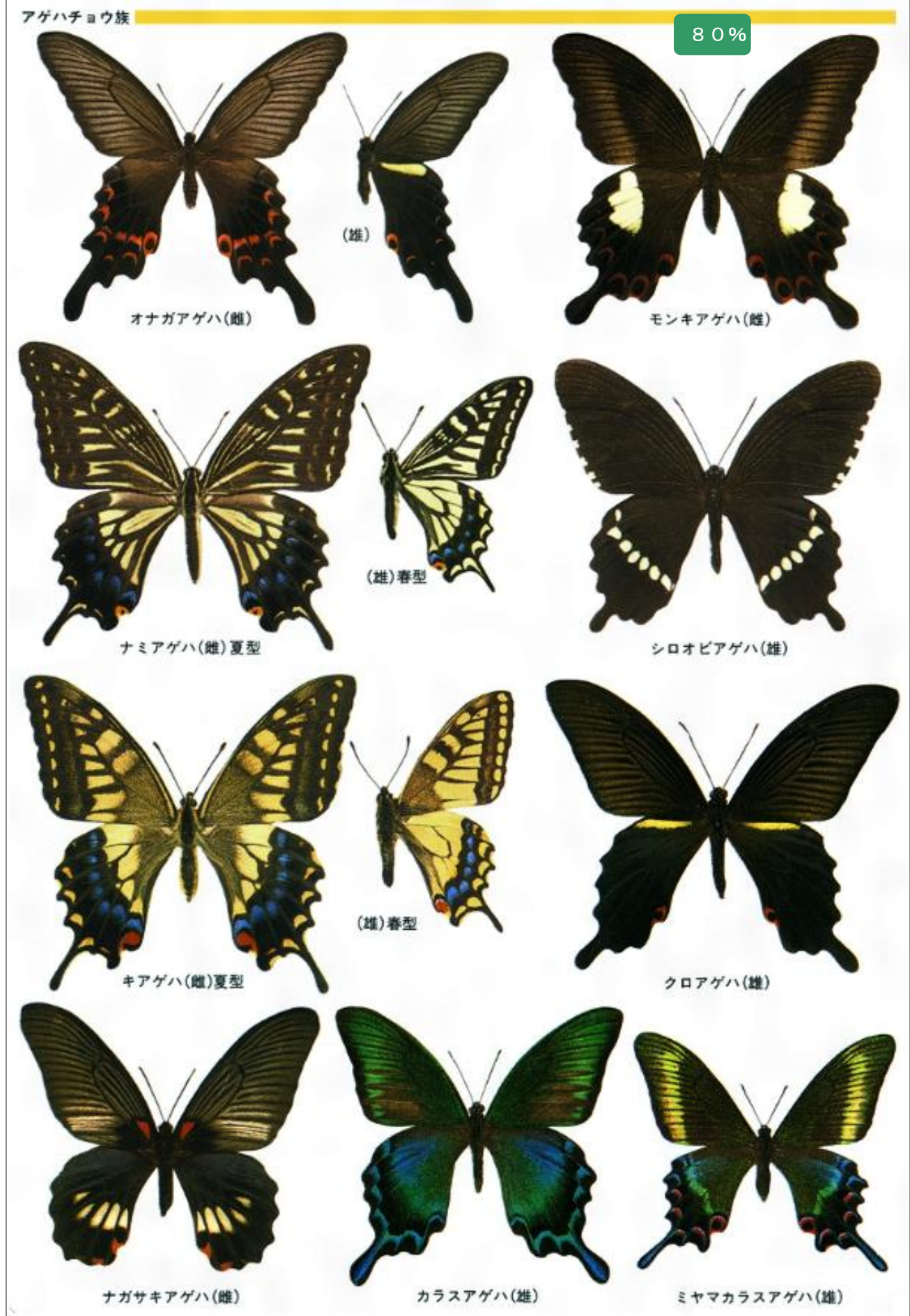
シロチョウ科

シジミチョウ科

タテハチョウ科

セセリチョウ科

2017. 12. 10 日本大百科全書（ニッポニカ）を参考に一部改変（Tentoumusi_0da）



日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

| | | |
|---|------------------------|--|
| 1 | メキシコアゲハ亜科Baroniinae | メキシコに産する1属1種の特異なメキシコアゲハを含む。幼虫の食草はマメ科植物である。 |
| 2 | ウスバアゲハ亜科Parnassiinae | 次の2族に分けられる。 |
| | (1) ウスバアゲハ族Parnassiini | 日本産では <i>Parnassius</i> 属の3種(ウスバアゲハ、キロウスバアゲハ・別名ウスバキチョウ、ヒメウスバアゲハ)が、この族に入る。食草は、日本産のものはすべてエンゴサク科植物であるが、外国産のものでは、ベンケイソウ科植物を食べるものがある。 |
| | (2) ギフチョウ族Zerynthiini | 日本産ではギフチョウ属の2種(ギフチョウ、ヒメギフチョウ)が、この族に入る。食草はウマノスズクサ科植物である。温帯から暖帯性のもので、熱帯から亜熱帯には分布しない。 |
| 3 | アゲハチョウ亜科Papilioninae | 次の3族に分けられる。 |
| | (1) タイマイ族Graphinini | 日本産では <i>Graphium</i> 属の2種(アオスジアゲハ、ミカドアゲハ)が、この族に入る。熱帯から亜熱帯にかけて種類が多い。幼虫の食草は、バンレイシ科、モクレン科、クス科植物である。 |
| | (2) アゲハチョウ族Papilionini | 日本産では <i>Papilio</i> 属の9種(ナミアゲハ、キアゲハ、クロアゲハなど)が、この族に入る。食草はミカン科植物がおもである。 |
| | (3) ジャコウアゲハ族Troidini | 日本産ではジャコウアゲハ、ベニモンアゲハが、この族に入る。東洋の熱帯に産するトリバネアゲハ、キシタアゲハなどの大形種もこの仲間である。食草はウマノスズクサ科植物である。 |



シロチョウ科

アゲハチョウ科

シジミチョウ科

タテハチョウ科

セセリチョウ科

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

アゲハチョウ科にもっとも近縁で、前脚は雌雄ともに正常で、蛹(さなぎ)は帯蛹(たいよう)になる点などは同様であるが、成虫の前脚脛節(けいせつ)の内側に棘(きょく)状突起がないこと、後ろばね内縁は特殊化がおこっていないこと、つねに尾状突起をもたないこと、幼虫は臭角をもたないこと、などの特徴によってアゲハチョウ科と相違する。

全世界に産するシロチョウ科は四つの亜科に分けられるが、そのうちマルバネシロチョウ亜科Pseudopontiinae（アフリカ特産）を除く次の三つの亜科が日本に産する。

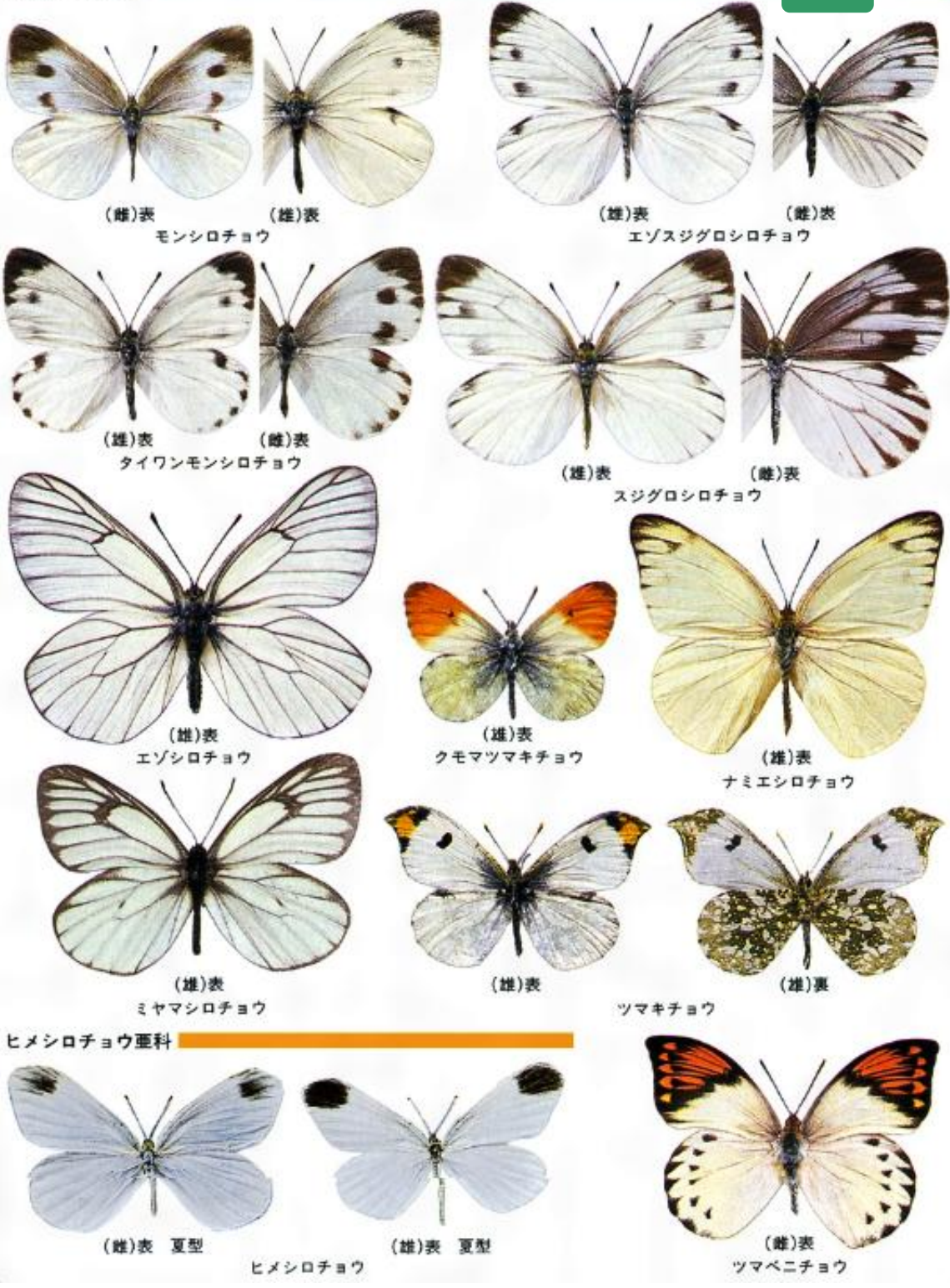
| | | | |
|---|------------------------|------------------|--|
| 1 | シロチョウ亜科Pierinae | | この亜科はさらに二つの族に分けられる。 |
| | (1) | シロチョウ族Pierini | 日本土着のものはモンシロチョウ属 <i>Pieris</i> の4種、トガリシロチョウ属 <i>Appias</i> の2種、エゾシロチョウ属 <i>Aporia</i> の2種の計3属8種。ほかに迷チョウとして日本に飛来するものに5種がある。蛹の形は「モンシロチョウ型」、幼虫の基本食草はアブラナ科とフウチョウソウ科で、エゾシロチョウ属2種の食性(バラ科、メギ科)は例外である。 |
| | (2) | ツマキチョウ族Euchloini | この族の雄は前ばねの先端部に赤色ないし橙(だいだい)色の斑紋(はんもん)をもつものが多い。日本産はツマキチョウ属 <i>Anthocharis</i> 2種とツマベニチョウ1種。ツマベニチョウは日本産のシロチョウ科ではもちろん最大であるが、世界的にみても最大級のシロチョウである。ほかに迷チョウとして日本に飛来するメスジロキチョウ、クロテンシロチョウはこの族に含まれる。蛹の形は「鳩胸(はとむね)形」、幼虫の食草はアブラナ科、フウチョウソウ科などである。 |
| 2 | モンキチョウ亜科Coliadinae | | 日本土着のものはモンキチョウ属 <i>Colias</i> の2種、ヤマキチョウ属 <i>Gonepteryx</i> の2種、キチョウ属 <i>Eurema</i> の3種、ウスキシロチョウ属 <i>Catopsilia</i> の2種の計4属9種。ほかに迷チョウとして飛来したフィールドダイダイモンキチョウの記録がある。蛹の形は「鳩胸形」、幼虫の基本食草はマメ科である。クロウメドキ科を食べるヤマキチョウ属2種の食性、クロマメノキ(ツツジ科)を食べるミヤマモンキチョウの食性はマメ科食からの二次的転換であると考えられる。 |
| 3 | ヒメシロチョウ亜科Dismorphiinae | | この亜科は前の2亜科とは類縁的に遠く離れたもので、その翅脈相などに著しい差異がある。この亜科の本拠は南アメリカで、南アメリカ以外では旧北区(ユーラシア大陸の中部から北部)にヒメシロチョウ属 <i>Leptidea</i> の1属数種を産する。日本産はヒメシロチョウ、エゾヒメシロチョウの2種。蛹の形は「鳩胸形」、幼虫の食草はマメ科。草原性のチョウで、飛び方は弱々しい。 |

モンキチョウ亜科



シロチョウ亜科

80%



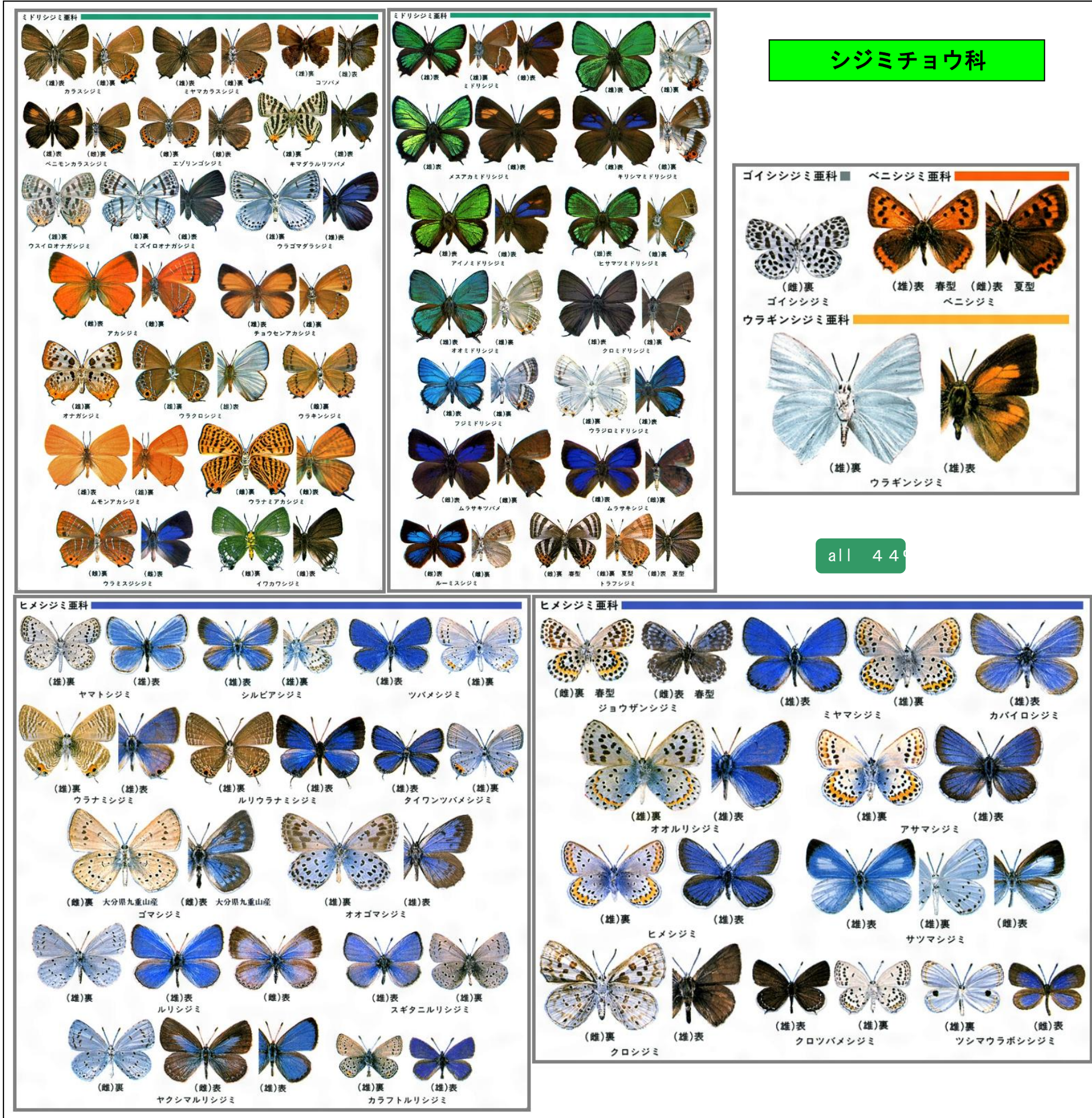
- アゲハチョウ科
- シロチョウ科
- タテハチョウ科
- セセリチョウ科

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

シジミチョウ科に属する種類は小形で、日本産のものではもっとも大形なものでもモンシロチョウよりはずっと小さい。はねの色彩、斑紋(はんもん)は多種多様で、裏面に複雑な斑紋をもつ種が多い。その表面の色彩も赤色、橙黄(とうこう)色、紫色、青藍(せいらん)色、金緑色、銀白色、黒褐色と変化に富む。幼虫はワジムシ形で特徴があり、多くの種は第7腹節の背面中央後縁に開口する蜜腺(みつせん)をもっている。アリは、この蜜腺から分泌される蜜をとくに好むため、幼虫に群がることが多い。この場合、幼虫に群がるアリは天敵から幼虫を守る役をするので、両者は相利共生の関係にあるといわれる。しかし、アリを取り除いても幼虫は正常に育つので、その成育にアリが不可欠というわけではない。クロシジミの幼虫は初めは樹上のアブラムシの分泌する蜜をなめて育つが、3齢まで育つと、クロオオアリがその巢中に幼虫を連れ込み、餌(えさ)を与えてこれを育てる。ゴマシジミ、オオゴマシジミの幼虫も食草を食べて3齢まで育つと、クシケアリによってその巢中に運び込まれ、そのあとはアリの幼虫や卵を食べて育つ。これらの3種のシジミチョウの場合は、特定のアリがいなければその生活は成り立たない。周年経過は、年1化あるいは多化性、越冬は卵、幼虫、蛹(さなぎ)、成虫のすべての段階で行われるが、越冬態はそれぞれの種によって定まっている。一般のシジミチョウ類の幼虫は双子葉植物(木本、草本)の新芽や新葉、花蕾(からい)や実などを食べて育つのが普通であるが、タケ、ササなどに寄生するアブラムシを食べて育つゴイシシジミのような純肉食性の幼虫もある。単子葉植物を食草とするものは日本産にはない。

日本産のシジミチョウ科は、普通次の5亜科に分類される。

| | | |
|---|--|---|
| 1 | ミドリシジミ亜科 Theclinae (英名hairstreaks) | 日本産のものではムラサキシジミの仲間(2属3種)、ミドリシジミの仲間(13属24種)、カラスシジミの仲間(1属4種)、コツバメ、トラフシジミの仲間(2属2種)、キマダラルリツバメなどが含まれる。後ろばねに細い尾状突起をもつものが多い。日本産のものはすべて森林生。 |
| 2 | ベニシジミ亜科Lycaenidae (英名coppers) | 日本産はベニシジミの1種のみ。草原生。 |
| 3 | ヒメシジミ亜科 polyommatainae (英名blues) | ヒメシジミの仲間(3属4種)、ルリシジミの仲間(2属7種)、ゴマシジミの仲間(4属5種)、ツバメシジミの仲間(3属4種)、ヤマトシジミの仲間(2属3種)、ウラボシシジミの仲間(1属2種)、アマミウラナシジミの仲間(1属2種)のほか、クロシジミ、ウラナシジミ、オジロシジミなどが含まれる。主として草原生、一部森林生のものを含む。 |
| 4 | ゴイシシジミ亜科Miletinae | この亜科は本来、熱帯から亜熱帯性のもので、日本産のゴイシシジミは例外的に北方に進出したものである。森林生。 |
| 5 | ウラギンシジミ亜科 Curetinae | この亜科は東洋熱帯特産のカレチス属Curetisの1属を含むのみ。シジミタテハ科に似た特徴があり、独立の1科とされることもある。日本のウラギンシジミはこの亜科の北限種。 |



タテハチョウ科

アゲハチョウ科

シロチョウ科

シジミチョウ科

セセリチョウ科

タテハチョウ科に属するチョウは一般に中形で、日本産で最大の種はオオムラサキ、最小の種はアカマダラである。色彩・斑紋(はんもん)および翅形の変化に富む。ジャノメチョウ科、マダラチョウ科、テングチョウ科と同じく前脚(ぜんきゃく)は種々の程度に退化し、胸部の下に畳み込まれて物に止まる場合には使用されず、また蛹(さなぎ)は尾端で垂下する（垂蛹(すいよう)）。

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説



70%

タテハチョウ亜科

75%

(雌)表
アカタテハ

(雄)表
ヒメアカタテハ

(雄)表
ルリタテハ

(雌)表
ヒオドシチョウ

(雌)表
クジャクチョウ

(雄)表
タテハモドキ

(雄)表
エルタテハ

(雌)表
シートテハ

(雌)表
リュウキュウムラサキ

(雌)表
メスアカムラサキ

(雄)表 春型
サカハチチョウ

(雌)表 春型
アカマダラ

(雄)表
コノハチョウ

(雄)裏

(雄)表
カバタテハ

カバタテハ亜科

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

世界に産するタテハチョウ科は、普通、12の亜科に分類されるが、日本にはそのなかの9亜科を産する。

| | | |
|---|------------------------|---|
| 1 | フタオチョウ亜科Charaxinae | この亜科の種はアフリカ、中・南アメリカ、東南アジアの熱帯から亜熱帯地方がその分布の中心。日本には沖縄本島にフタオチョウの1種のみが産する。体は太く強剛、後ろばねに普通2本の尾状突起がある。幼虫はコムラサキ亜科の種に似た「ナメクジ状」、頭部の1対の突起は幅広くその先端は分岐する。蛹は「だるま形」で丸く、背面中央を縦走する顕著な稜(りょう)がない。 |
| 2 | コムラサキ亜科Apaturinae | この亜科の分布の中心は東アジアの温帯から暖帯・東南アジア、北・南アメリカにもかなりの種類を産するが、アフリカには1種を産するのみ。日本産は3属4種。尾状突起はない。幼虫は「ナメクジ状」で、頭部には分枝をもつ1対の角(つの)状突起があり、尾端は二又(にさ)する。蛹は左右に扁平(へんぺい)、背面中央を縦走する顕著な稜がある。 |
| 3 | イシガケチョウ亜科Marpesiinae | 東南アジア、アメリカ大陸の熱帯から亜熱帯が分布の中心、アフリカには1種を産するのみ。日本産はイシガケチョウの1種のみ。中・小形種。幼虫はコムラサキ亜科に似るが細長く、頭部には1対の角状突起があるが、分枝はなく、尾端は二又しない。蛹は左右に扁平、背面中央を縦走する稜があり、頭部に1対の長い棒状突起があり、ややコムラサキ亜科の蛹に似ている。 |
| 4 | スミナガシ亜科Pseudoergolinae | 東南アジアよりヒマラヤ、東アジアの暖帯に分布する少数の種を含む群で、日本産はスミナガシの1種のみ。幼虫はイシガケチョウ亜科に似て細長く、頭部に分枝を欠く1対の角状突起があるが、腹部背面には突起がない。蛹の形態は特異、中胸背面は平板状に突出し、その先端は鼻状に後方に曲がり、側面から見ると、第2腹節の突出部との間に「釘(くぎ)抜き状」の空間をつくる。 |
| 5 | ヒョウモンチョウ亜科Argynninae | 多くの種は橙(だいだい)色の地色に黒色の斑点をもち、野獣のヒョウを思わせる色彩・斑紋をもっている。アメリカ大陸、東南アジアにもかなりの種類が分布するが、ユーラシア大陸の寒帯から温帯にもっとも種類が多い。日本産は10属15種。幼虫は細長く、胴部各節に多くのほぼ同形の棘(きょく)状突起がある。蛹にも胸・腹部に突起をもつものが多く、その突起のいくつかは銀白色から黄金色に光ることが多い。 |
| 6 | イチモンジチョウ亜科Limenitinae | 全世界に広く分布し、日本産は4属11種。日本産に関する限り、前ばねと後ろばねを貫く1本の白帯をもつイチモンジ型と、3本の白帯をもつミスジ型に分けられる。幼虫の胴部の棘状突起の大きさは不同、蛹の形は背・腹面から見ると「バイオリン形」、胸・腹部に突起はない。 |
| 7 | タテハチョウ亜科Nymphalinae | 全世界に広く分布し、日本の土着種は11属17種。幼虫は細長く、胴部各節に同大の棘状突起がある。頭部には棘状突起をもつものと、もたないものがある。蛹も胸・腹部に突起をもつ。 |
| 8 | ヒョウモンモドキ亜科Melitaeinae | はねの表面は橙色で多くの黒斑があり、一見ヒョウモンチョウに似ているのでこの名があるが、近い類縁関係はない。ユーラシア大陸の寒帯から温帯、北・南アメリカ大陸に分布するが、東南アジア、アフリカには産しない。日本産は2属3種、すべて一化性で草原性のチョウである。幼虫はタテハチョウ亜科に似て全身に棘(とげ)があるが、蛹は地色白色で、黒色・橙色の斑紋があつて、タテハチョウ亜科のものとは異なる。 |
| 9 | カバタテハ亜科Biblidinae | アフリカ、アジア、アメリカの熱帯から亜熱帯に分布し、日本では1種(カバタテハ)が八重山(やえやま)列島に迷チョウとして飛来する。形態的にイチモンジチョウ亜科に似た点もあるので、イチモンジチョウ亜科内の一群とする学者もある。 |

アゲハチョウ科

シロチョウ科

シジミチョウ科

セセリチョウ科

TOP

セセリチョウ科の種は一般のチョウ（アゲハチョウ上科Papilionoidea——日本産のものではセセリチョウ科以外のすべての科を含む）に比べて形態そのほかの性質に著しい相違があり、セセリチョウ上科Hesperioideaとして分類される。

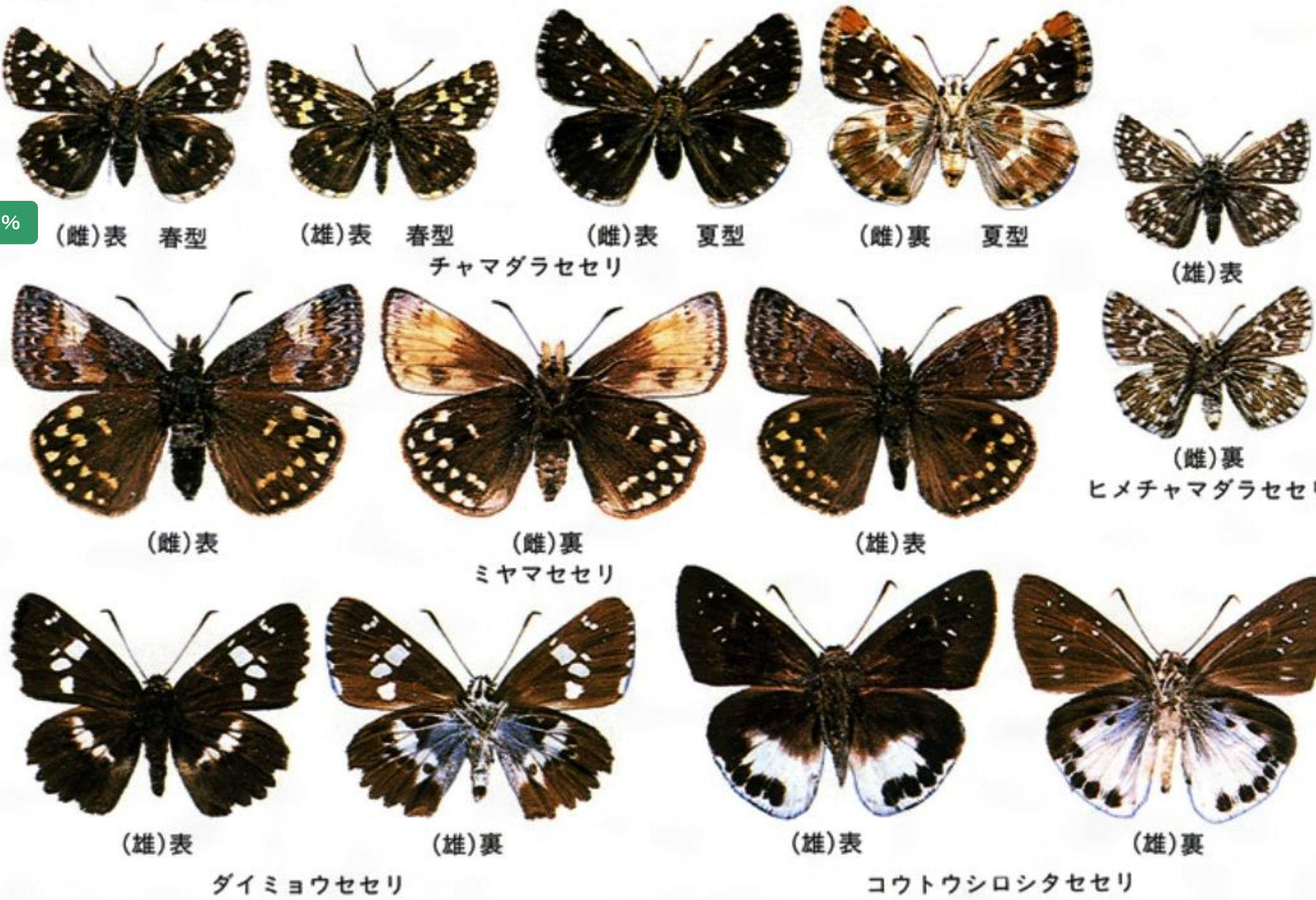
セセリチョウ科に属する種類は小形で、日本産ではもっとも大型のアオバセセリではねの開張は45～55ミリメートル程度である。近年、東南アジアより沖縄本島に侵入したバナナセセリは世界最大のセセリチョウの1種で、雌のはねの開張は68～72ミリメートルにも達する。ギンイチモンジセセリのような例外もあるが、一般にはねの大きさに対して胴体は太く、飛び方はきわめて速い。一般に多化性であるが、寒冷地では年1化の種も多く、暖地では多化性の種も寒冷地では年1化の経過をとる場合もある。幼虫は細長く、食草の葉を巻いて巣をつくり、その中に隠れている。日本大百科全書（ニッポニカ）の解説

ピロードセセリ亜科



65%

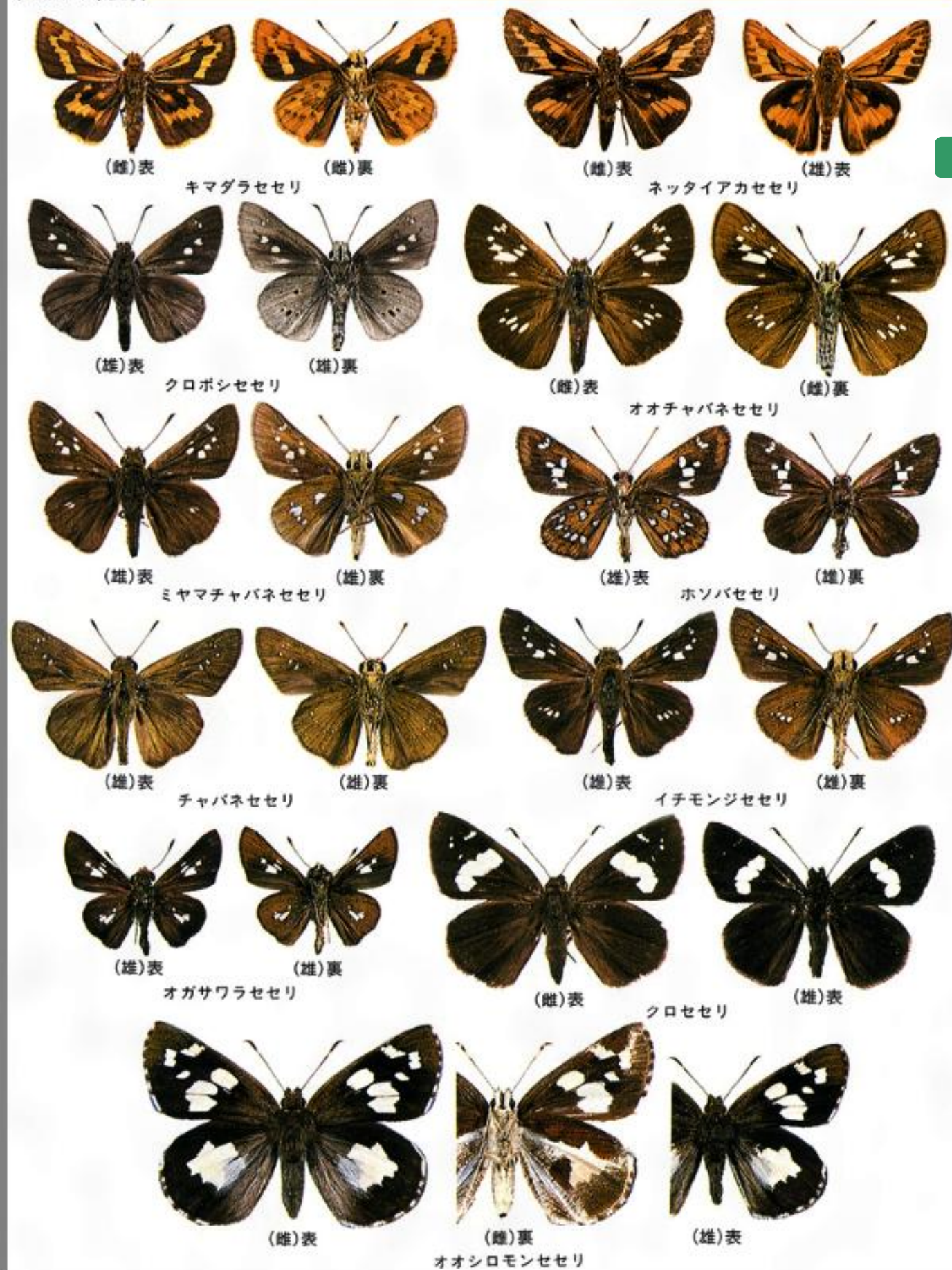
チャマダラセセリ亜科



日本産セセリチョウ科は次の三つの亜科に分けられる。

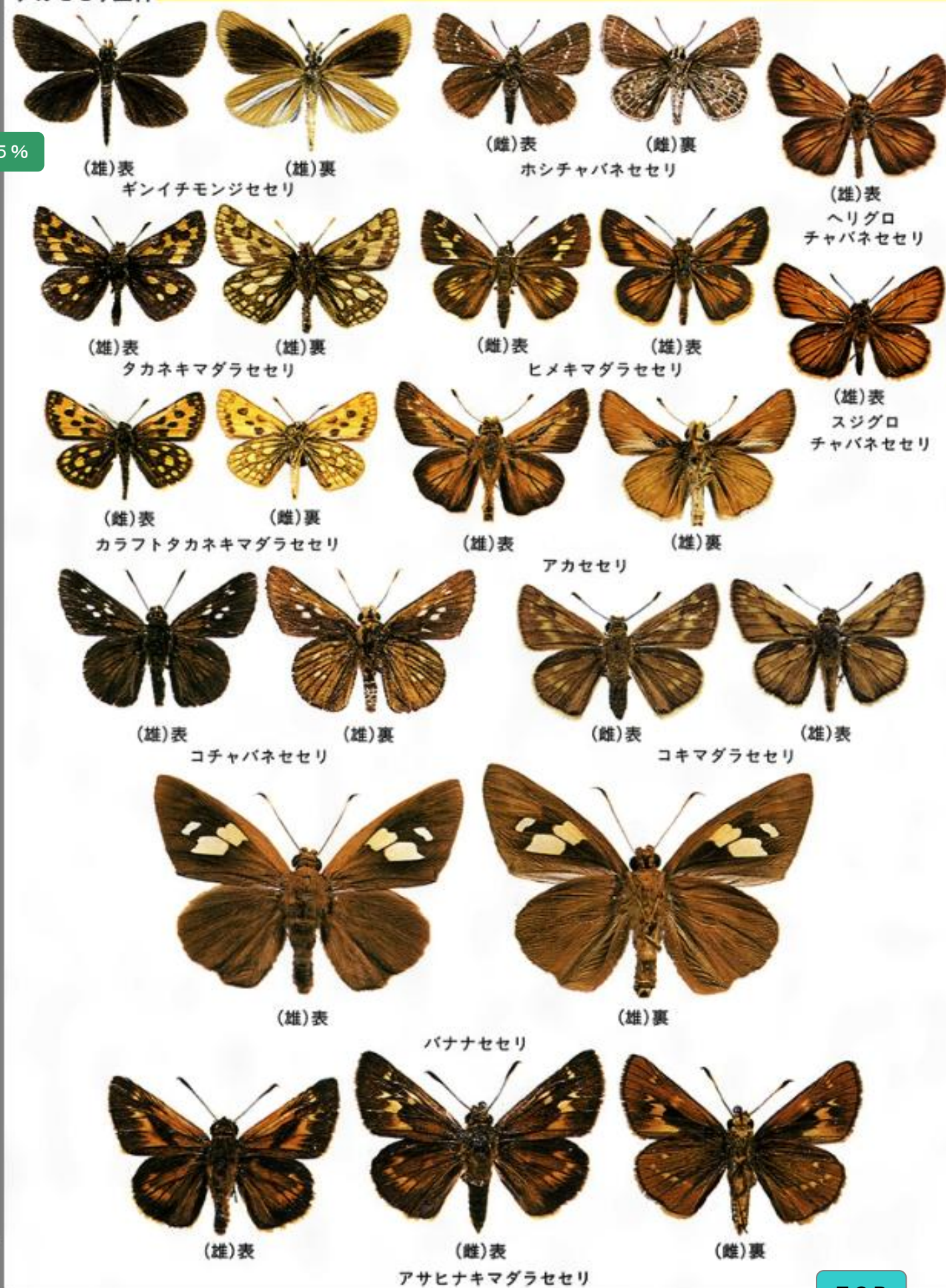
| | | |
|---|----------------------|---|
| 1 | ピロードセセリ亜科Coeliadinae | 日本産は4属5種。このなかの1種（テツイロピロードセセリ）は、近年に八重山(やえやま)列島の西表(いりおもて)島に侵入、定着したものである。セセリチョウ科のなかでは大型種で、静止の場合には、はねを立てる。幼虫は美しい色彩・斑紋(はんもん)をもち、日本産に関する限りその食草は双子葉植物。 |
| 2 | チャマダラセセリ亜科Pyrginae | 日本産は4属5種。成虫（チョウ）は静止の場合には、はねを水平に広げる。幼虫の食草は双子葉植物（3種）あるいは単子葉植物（2種）。 |
| 3 | アカセセリ亜科Hesperiinae | 日本産は18属25種。このなかの2種（バナナセセリ、クロボシセセリ）は近年琉球(りゅうきゅう)に侵入し定着したものである。成虫は静止の場合、はねを立てるかあるいは半開にする。幼虫の食草は単子葉植物。双子葉植物を食べるものはない。 |

アカセセリ亜科



85%

アカセセリ亜科



アゲハチョウ科

シロチョウ科

シジミチョウ科

タテハチョウ科

TOP